



FD NEWSLETTER

CENTER FOR  
TEACHING AND  
LEARNING

INTERNATIONAL  
CHRISTIAN  
UNIVERSITY

TOKYO, JAPAN

Vol. 25

No. 1

September 2020



## 目次

1. はじめに ... 1
2. オンライン授業を支える ICT 環境と CTL の対応について ... 2
  1. オンライン授業を支える ICT 環境 ... 2
  2. コロナ禍を受けての CTL の対応 ... 3
3. オンライン授業に関するアンケート調査結果 ... 6
4. 新企画「Brown Bag Lunch & Learn」 ... 7
5. Oxford EMI トレーニングプログラムの開催 ... 8
6. 新 TA 制度導入に向けた取り組み ... 12
7. 編集後記 ... 14

## はじめに



小瀬 博之

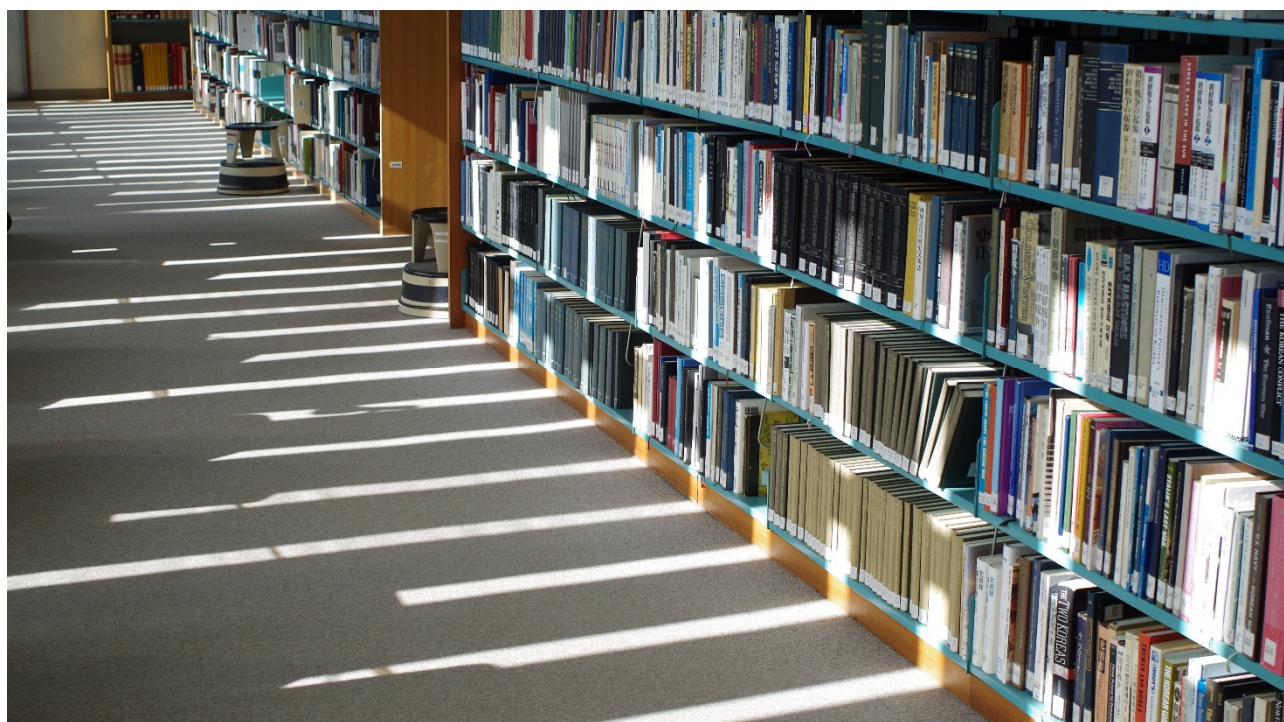
学修・教育センター センター長

この FD Newsletter が発行される頃、既に秋学期の授業が本格的に始まっていると思います。連日コロナウイルスの報道に曝されて、コロナ報道に対する感覚麻痺を感じますが、現実には、世界中の大学で否応なくオンライン授業に移行せざるを得なくなり、その状況は今も続いています。

私たちの生活様式や働き方を一変させたコロナ禍が大学教育にも激変をもたらしたこと自体はよかったと考えます。激変する世界に対応できる人材を輩出する大学がコロナ禍を実感できたという意味においてです。また、にわか作りで行われたオンライン授業でしたが、意外にも多くのメリットや新しい可能性を強く自覚させられました。今後対面教育が再開されても、オンライン授業ならではの利点のいくつかは維持され、強化され、また対面授業とブレンドされながら発展していくことでしょう。

オンライン授業のいくつかの利点は、あまりにその利点が大きいため、対面授業に戻ることを難しくさせるように働くかもしれません。その功罪については今後多くの検証や研究が行われていくでしょうが、リベラルアーツ教育や ICU が大切にしている対話のあり方についても、影響は免れません。

コロナ禍の収束を誰も見通せない今、しばらくはオンライン授業は残り続けます。まだまだ目先のオンライン化対応や、オンライン授業の更なる充実に意識を向けることになると思いますが、オンライン化で失ったものや、失ったかもしれないものに心を向けることも忘れてはいけないと思います。同じ物理空間を同時に共有すること、電車で揺られながら授業の話を反芻すること、手書きで手早くコメントシートを書き上げること、教室の人熱れ、授業に疲れ居眠りする学生の寝息を耳にすること、教室の窓越しに季節の変化を感じるなど、どれがなくなっても授業は成立します。授業の成立＝教育目標の達成でないとすると、後者の意味を再確認する必要があるのかもしれません。



## オンライン授業を支える ICT 環境と CTL の対応について

### 1. オンライン授業を支える ICT 環境

新型コロナウイルスの影響で、ICU は 4 月からの授業をオンラインでスケジュール通り開始しました。

これまでに 2003 年に SARS が流行した際に、香港では大学が閉鎖となり、オンラインで授業を行っていましたが、ICU でも 2009 年の新型インフルエンザ、2011 年の東日本大震災のとき、当時の FD 主任から、万が一大学で授業ができない状況になった場合でも ICU は 6 月に卒業する学生がいる、休講はできるだけ避けたい、教室の外で授業を続けられるか、その準備をしておく必要がある、と言われたことを覚えています。幸い休講にならずにすみましたが、状況によっては、Moodle で授業を行っていたかもしれません。

#### LMS (Learning Management System) の活用

LMS は 2002 年頃から WebCT というシステムを使い始め、その後、NetCommons や Blackboard などを比較しながら、Moodle は 2006 年冬学期から導入しています。徐々に利用する授業は増え、ここ数年は毎学期 160 から 180 ぐらいのコースで利用されていました (図 1、P.4)。最近では Google Classroom の利用も増えてきています。

LMS をブレンディッド・ラーニングの形で利用することで、教材のアップロードやレポートのオンライン提出はもちろん、非同期のディスカッションフォーラムを用意することで、授業後も議論を続けることができます。LMS を導入した初期の頃から、英語で授業を開講されている先生方からは、オンラインディスカッションの方が普段教室のディスカッションで発言しない学生が、活発にディスカッションに参加している、と好評でした。

#### 授業における動画の活用

事前に講義部分の動画を Moodle で視聴できるようにしておく反転授業のスタイルは、対面授業の時間をディスカッションや、より高度な内容などに、有効に使うことができるようになり、また開講言語が母国語でない学生にとっては何度でも繰り返し視聴することができ、文字情報もあるため、より理解が深まる、といったメリットがあります。障がいのある学生のために授業内容を収録することもあります。授業後に Moodle 等で見られるようにすれば、その学生のためだけでなく、他の学生も理解

を深めるために何度も視聴することができるようになります。

これまで、反転授業用の動画やプレゼンテーションの画面と音声をキャプチャーして動画を作成するソフトをいろいろと試してきましたが、2019 年に Kaltura という動画プラットフォームを導入し、Moodle と連携して手軽に動画を作成することが可能になりました。学生がプレゼンテーション動画を作成することもできますので、授業時間外に動画を作成、共有し、オンラインでのコメントやディスカッションを行うことも可能です。

#### 他大学との授業交流

2000 年代の初めは、Polycom 社の TV 会議システムを使い、語学の授業 (例えば ICU における中国語と北京大学における日本語の授業) や、様々な分野の授業で海外の大学と教室と教室を繋ぎディスカッションを行ったり、ゲストスピーカーの方のお話を伺ったり、あるいは小学校などと繋ぐこともありました。

2015 年 3 月に Global Liberal Arts Alliance (GLAA) に加盟すると Global Course Connection という取り組みの中で、加盟校と授業を、教室と教室、あるいは、グループワークではそれぞれのグループ同士を Web 会議システムで繋ぐ、グループのプレゼン動画を作成し、オンラインで共有するというような試みも行われてきました。会議システムも、高価な TV 会議システムから、手軽に使える Skype などの Web 会議、そして Google Hangouts、Zoom とどんどん進化してきています。それらの取り組みが、COIL 型授業にもそのまま生かされています。

#### オンライン授業へ

Moodle などの LMS をベースにしたオンデマンドでの動画の配信やディスカッション、Web 会議もオンライン授業で重要なツールです。さらに言えば、他大学との授業交流の方法は、教室での対面授業に一部の学生がオンラインで参加するハイブリッド授業の一つの形です。

このような取り組みを日頃から行っていたことが、授業のオンライン化へのハードルを少しでも下げられたのではないかと思います。また、ここ数年で技術がめざましく進歩し、これらの ICT ツールが比較的手軽に利用できる様になったことも大きいと思います。

## 2. コロナ禍を受けての CTL の対応

ICU の対話型授業をオンライン授業にするために、3 月 16 日学内会議でのオンライン授業実施の決定を受け、全ての授業をオンライン化するためにどのような提案をしていくべきか検討を進めました。短い準備期間に加え、初めて ICU で講義する教員もいる状況を鑑み、以下の 4 つのツールに限定してサポート体制を整えました。

3 月 31 日には ICT ツールの活用法を掲載した Moodle コースを公開、4 月 3 日～6 日には教員によるウェビナーを開催し、授業での実践的な活用法を紹介しました。

授業開始後は、Zoom での個別相談を開始、並行して学生用・教員用の FAQ を充実させ、オンライン授業に必要な情報を集約、試験など授業の進行に沿った情報の周知とサポートの拡充を行いました。これらの提案には、これまで CTL で取り組んできた授業サポート事例が多く活かされています。

1. 出席の取り方 (Moodle / Zoom)
2. 資料の共有 (Moodle)
3. 講義動画 (同期型 Zoom / 非同期 Kaltura)
4. ディスカッション (Moodle / Zoom / Google Meet)
5. プレゼンテーション (Zoom / Kaltura)
6. 課題の提出 (Moodle / Kaltura)
7. コメントシートの提出 (Moodle)

### 学内サポート体制の構築 (図 2、P. 4)

オンライン授業の実施にあたり、関連部署との連携は不可欠でした。他大学でアクセス集中によるトラブルが報告される中、大きな問題もなくオンライン授業を遂行できた背景には IT センターの多大な尽力がありました。

3 月 24 日にオンライン・フォームでの問い合わせ受付開始、多岐に渡る問い合わせに対応するため、学内問い合わせ窓口は Google Forms に一本化。Google Sheets での進捗共有とグループ Chat での情報共有というシンプルなフローで、離れた部署やテレワークでも連携できる体制を整えました。

CTL 内では問い合わせを分類し、専門でないスタッフも対応。専門スタッフは高度な問い合わせや問題解決のための時間を確保できたことが、600 件を超える問い合わせのスムーズな対応につながりました。また、デパートメント内での教員同士のサポートやピアグループが立ち上がったことも全授業オ

ンライン化というチャレンジの大きな助けとなりました。

### 春学期授業でのオンラインツールの活用

Moodle は毎学期 7 割程度の講義で利用されていましたが、多くが資料を Upload するのみで、オンライン授業として活用できるとは言い難い状況でした。オンライン授業開始前に開催した Application Workshop for Online Class には、290 名が登録 (専任教員 111 名、PTL / TA 127 名、職員 50 名、その他 2 名) し (図 3、P.5)、春学期に利用された 330 の Moodle コースのうち、同期型講義 (Zoom / Google Meet) 209 コース、非同期型講義 (Kaltura) が 90、discussion や assignment は 200 以上のコースで活用されました (図 4、P.5)。

オンライン授業の実施により、数式の利用、通訳や語学講義での音声提出、テストの時間制限や時差のある学生への対応といった新たな課題が浮き彫りになりました。CTL ではこれらの問題を解決し、秋学期のハイブリッド授業にむけて、またコロナ収束後の授業での活用のための準備を進めています。

### おわりに

今回は必要に迫られる形で一気にオンライン化が進みましたが、完全に対面の授業に戻ったとしても以前のような授業形態にそのまま戻ることはないでしょう。

実際に、オンライン授業について先生方や学生に実施したアンケートの回答を見ても、「チャットでの質問や投票機能などにより、コミュニケーションが活発になる」「インクルーシブな教育を提供することができる」「事前に授業内容を伝えておくことで学生がよく準備している」「英語開講などの授業動画を繰り返し見ることができるので対面式の授業より理解度が高まる」「Discussion Forum 上だと他の人の意見をじっくり理解しながら自分の考えを深めて発言することができる」などの声がありました。まさに、これまで通常の授業の中でも必要に応じて活用していた ICT ツールが、教室に集まらない状況の中で威力を発揮し、さらに、大きなメリットとして認識されたと言えます。

授業のオンライン化は、対面とオンラインをどのように組み合わせより効果的な授業を行うか、逆に対面でしか提供できない教育のあり方についても考えるきっかけになったと思います。

(学修・教育センター 小林、浅野)

## 【参考】

Application Workshop for Online Class 2020（本学関係者のみアクセス可）：

<https://moodle3.icu.ac.jp/course/view.php?id=2533>

Moodle FAQ（本学関係者のみアクセス可）：

<https://sites.google.com/icu.ac.jp/moodle-3-instruction/moodle-faq-2020>

“How do you teach online?” (CTL Website)：

<https://office.icu.ac.jp/ctl/OnlineClass/index.html>

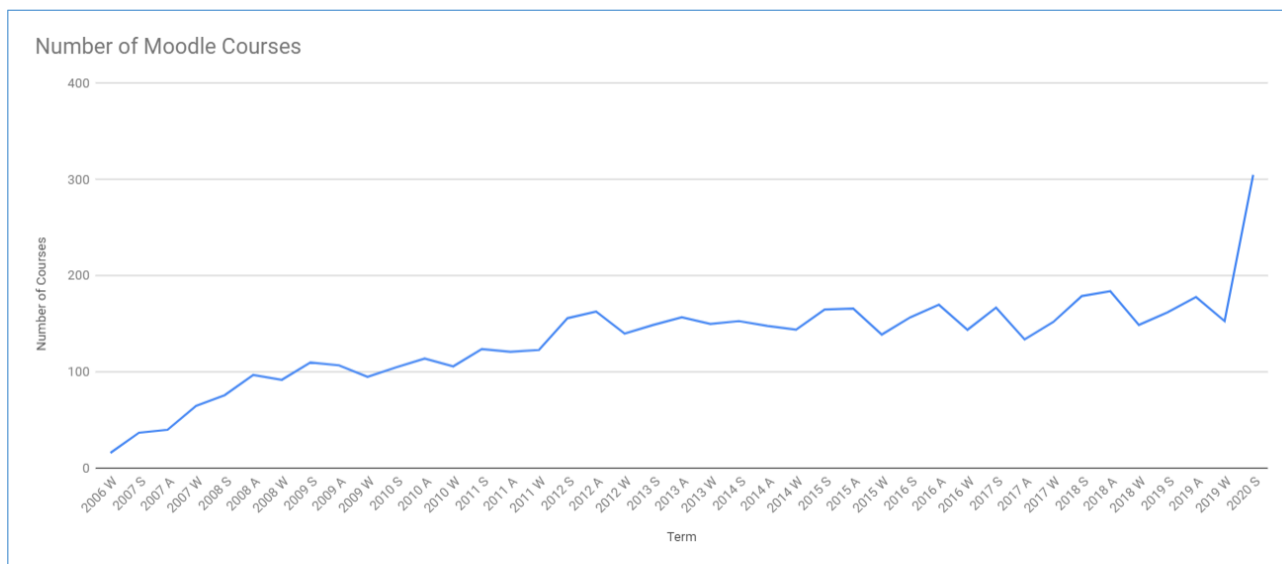


図 1：Moodle を利用したコース数（2006 年から 2020 年）

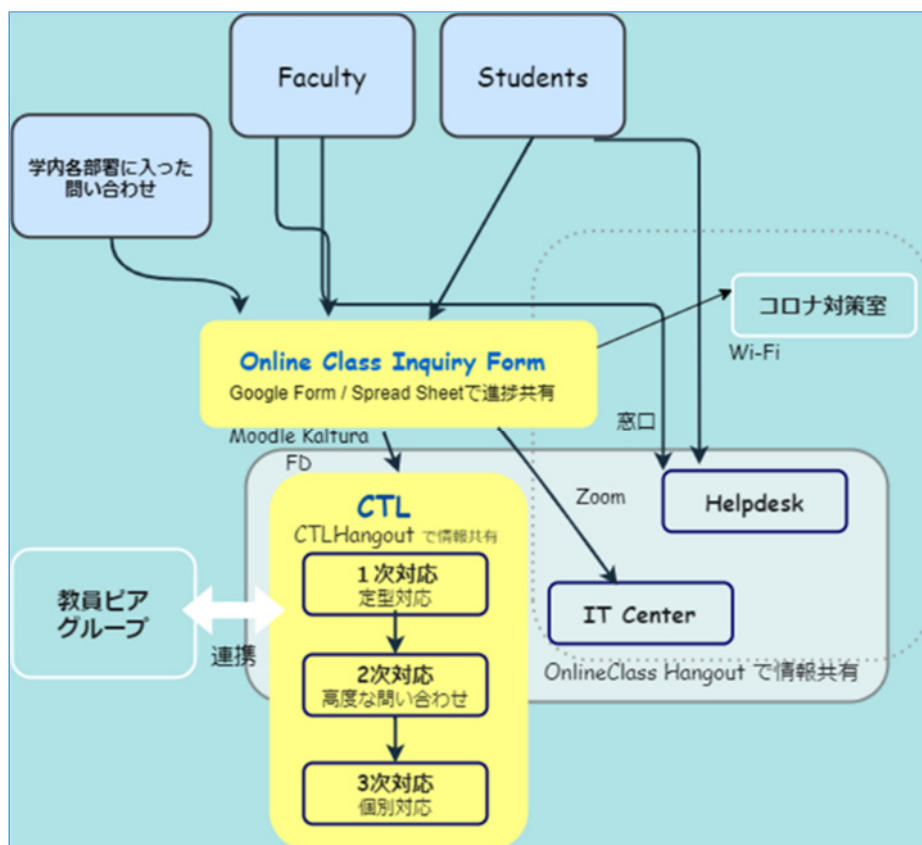


図 2：学内のサポート体制

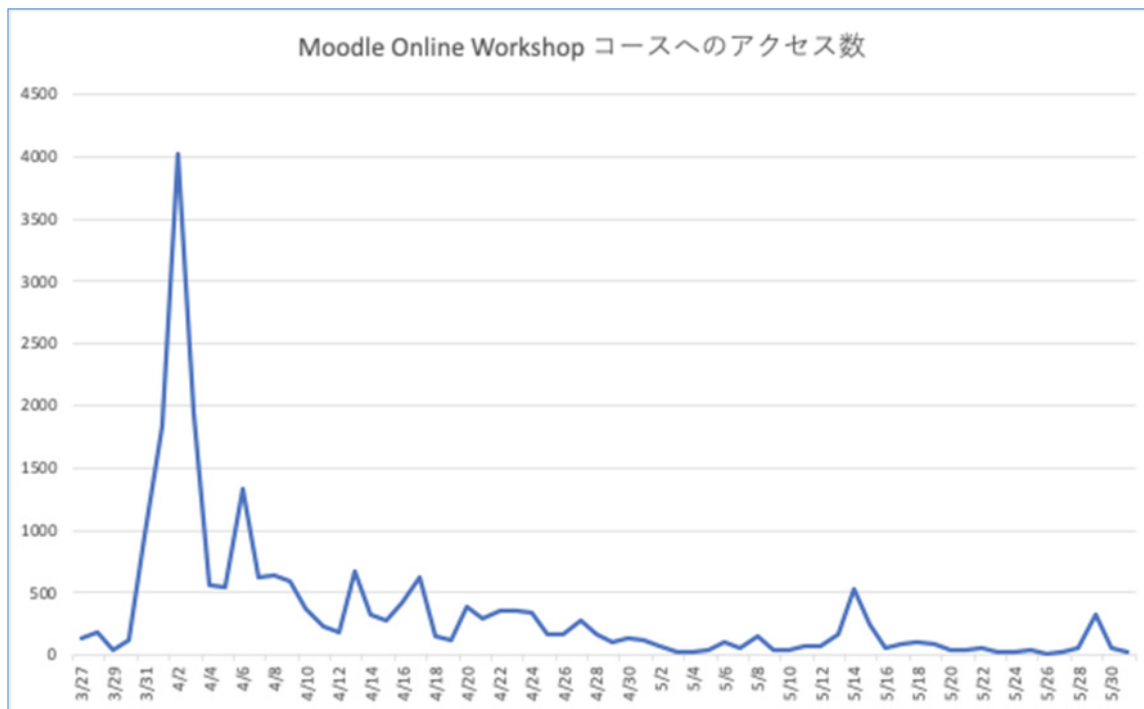


図 3 : Moodle Online Workshop コースへのアクセス数

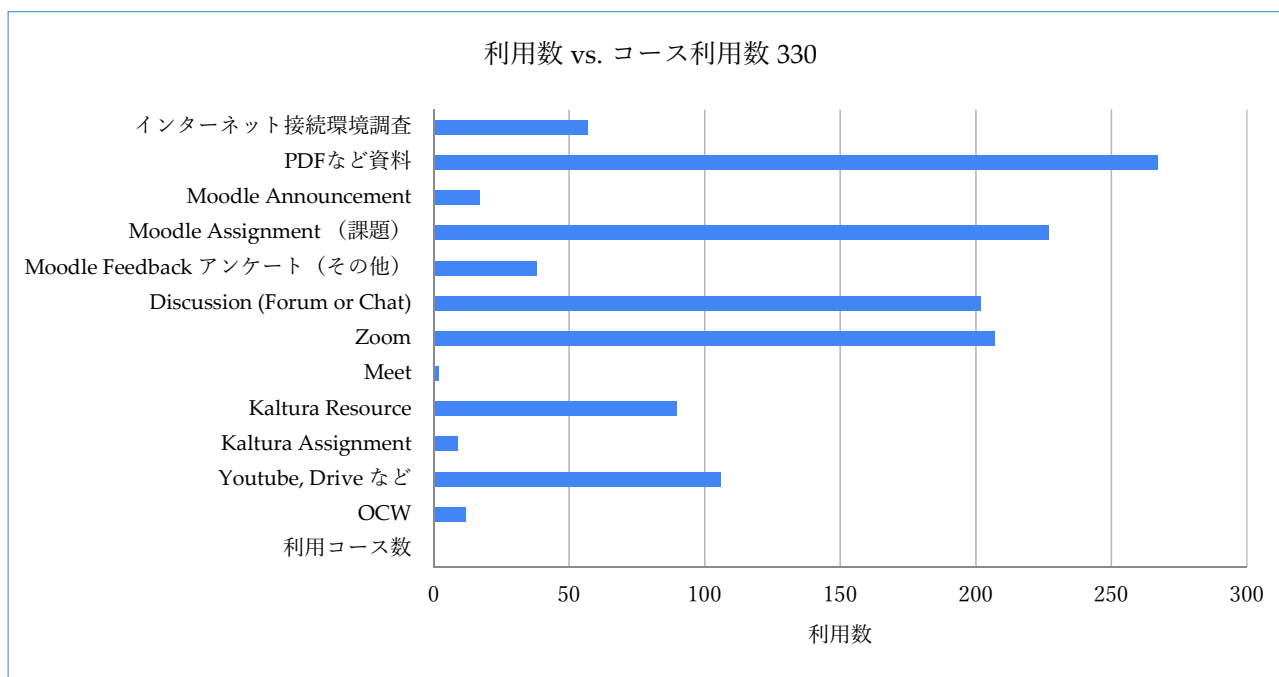
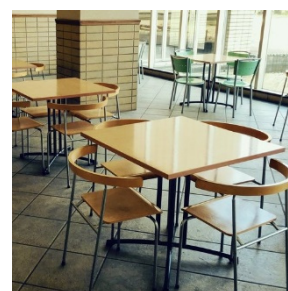
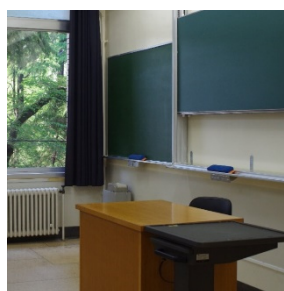
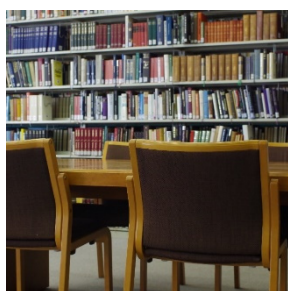


図 4 : Moodle コースでのオンラインツール利用状況 (2020 年春学期)



## オンライン授業に関するアンケート調査結果

学修・教育センターでは、5月にオンライン授業に関するアンケート調査を実施しました。

本学は新型コロナウイルス感染防止のために、春学期（4月～6月）の授業については、一早くオンラインでの実施を決定し、Zoomなどのアプリケーションを使った同時双方向型や、事前に収録した映像を学生が好きな時間に受講するオンデマンド型の両方を駆使しながら、授業を展開しました。

アンケートの回答には、「ある授業で遺跡からの中継があった。150人程の登録者がいるので対面授業では実現できなかったと思う。とてもよい学びになった」、「意見交換の手段が複数（ライブディスカッション、チャット、Moodleなど）用意されていたので、口頭での発言が苦手な人も自分にあったツールで意見を述べていたように思う」といった、同時双方向型のオンライン授業に関する肯定的なコメントがありました。また、オンデマンド型の授業に関しても、「トピックごとに分割動画（1クリップ30分程度で簡潔にまとめられたもの）は集中して取り組むことができた」という声がありました。

オンライン授業で学生から好評だった科目については、「Good Practice」として学生と教員のコメントを掲載しています。

<https://sites.google.com/info.icu.ac.jp/onlineclass-j/good-practice>

一方、オンライン授業のデメリットとしては、「板書がないので内容がわかりにくい」、「教員・学生間とコミュニケーションが取りにくい」といった声や、眼精疲労や腰痛など長時間画面に向かうことによる体の不調を訴える声がありました。また、プレゼンテーションのしやすさについてはオンラインと対面の差は大きくありませんでしたが、ディスカッションはオンラインよりも対面の方がやりやすいという声が多くありました。

オンライン授業に関するアンケート結果概要（抜粋版）は、以下よりご確認ください。

<https://sites.google.com/info.icu.ac.jp/onlineclass-j/home>

9月から始まる秋学期（11月末まで）は、授業毎に「オンライン」もしくは「オンラインと対面のハイブリッド」のどちらかで開講予定です。本学では、アンケートで集まった学生からの声をもとに、これまで通りの対話を重視したよりICUらしい学びを提供できるよう努めていきます。

=====

アンケート概要

調査期間：2020年5月22日～31日

調査対象：全学部生・大学院生（3190名）

回答者数：1229名（38.5%）

=====

（学修・教育センター）



## 新企画「Brown Bag Lunch & Learn」

教育・言語教育部門の Insung Jung 先生の発案により、ランチを持ち寄って教職員が集まる場「Brown Bag Lunch & Learn」の提供を開始しました。教員と職員という枠を超えて本学の教育などについて語り、交流を行うことを目的としています。

当初はランチを食べながら対面で実施する予定でしたが、2020 年度春学期はオンラインで 3 回開催。毎回約 10 名の先生方が参加してくださいました。職員の参加は CTL と IT センターからと限定的でしたので、秋学期以降はより積極的に様々な部署からの参加を促していきます。

第 1 回目（5 月 11 日）と第 2 回目（5 月 22 日）の回では、テーマを「Challenges and Successes of Online Teaching」と設定し、オンライン授業の長所、短所、ツールの紹介、感想を述べあいました。初対面の先生方もいらっしゃいましたが、思わず話し込んで予定の時間を過ぎる回もありました。また、職員が出席していたことで、オンライン授業やツールの問題点を把握し、速やかに対応することができました。（例：ペンタブレットの紹介、Zoom や Moodle の活用法の紹介など）

第 3 回目は春学期終了が迫った 6 月 18 日に「今学期を振り返って ～Reflecting on Your Experience This Spring Term～」というテーマのもと、CTL 運営委員会委員／FD 委員である生駒先生がファシリテーターを務めてくださいました。教員 10 名と CTL ならびに IT センター職員 5 名が参加し、以下のような意見や感想を共有しました。（一部抜粋）

- ・ 学生とアイコンタクトが取れないため、コミュニケーションにより注意を払うようになった。

- ・ ウェブで公開されている MOOC などの既存のリソースが数多くある中、その場で、かつ、ICU でしかできない講義とは何かについて考えさせられた。
- ・ 英語が母国語ではない学生にとって、オンライン授業では質問や回答が記述式になったことはメリットだったと感じている。
- ・ 授業が終わった後に Zoom 上に教員が残っていると、学生が個別に質問や話をしてくることがあり、意図的に残るように心掛けた。授業中よりも話しやすいようだ。
- ・ 学生のエンゲージメントの重要性がより一層増している。
- ・ 学生のモチベーションを持続することも重要。授業中に、アクティビティ、小テスト、Moodle で資料を読む時間などを意図的に組み込んでいる。
- ・ Zoom のブレイクアウトセッションでグループワークをした後に、全員で共有する Google ドキュメント等に各自の回答を同時に書き込んでもらった。この方式は、授業が対面形式に戻ったとしても有効活用ができると思う。
- ・ 新型コロナウイルスに関する課題を出したところ、学生たちの関心が高く、反応が良かった。
- ・ Zoom のブレイクアウトセッションでグループワークをした際、上級生が新入生にグループワークの進め方や学生生活についてのアドバイスをしていたことがあり、学生同士のコミュニケーションが取れていた。

秋学期の Brown Bag Lunch & Learn は、9、10、11 月に計 3 回、CTL 運営委員会委員／FD 委員によるファシリテーションで実施する予定です。

（学修・教育センター 大野）



## Oxford EMI トレーニングプログラムの開催



2020年3月9日～3月15日に Oxford EMI トレーニングプログラムがオンラインで開催されました。

当プログラムは、英語が非母国語の国での英語による授業の向上を目的としており、Oxford EMI Training 講師陣が英語による教授法をレクチャーするものです。2018年8月および2019年3月に本学で実施し、今回も本学オスマー図書館で開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で急遽オンラインで行うこととなりました。全国10の高等教育機関から本学教員6名を含む合計25名が参加しました。

コースはウェブ会議システム（Zoom）とラーニング・マネジメント・システム（Moodle）を使って行われました。初日にコースの概要と進め方、講師によるレクチャー「Internationalisation of Higher Education」が行われ、5日間のトレーニングを一緒に行うチーム分けが発表されました。

毎日 Moodle 上にある課題を個人及びグループで16時までに終わらせ、18時から Zoom で Oxford EMI Training 講師陣からのフィードバックレクチャーを受けるというスケジュールで行われました。

5日間のトレーニングで、異なる英語レベルや個性を持つ学生達に対するインタラクティブな授業の組み立て方、学生の理解を深める為に必要なテクニック等を講師陣によるアドバイス、グループワークやディスカッションを通して学び、最後に自身の授業の映像を Oxford EMI へ送りフィードバックを受けるという課題が出ました。

受講した教員からは「英語での教授法やアクティブラーニングについて学ぶ機会となった」「他大学、他分野の教員と交流が持ててよかった」等の感想とともに、「春学期からオンラインで授業を行うにあたり大変参考になった」という声も多く聞かれました。

（学修・教育センター 細野）

## 岡村 秀樹

### 自然科学デパートメント

昨年までは対面で行われていたこのプログラムですが、今年は新型コロナウイルスの流行により遠隔授業になりました。この時点では教員のほとんど誰も遠隔授業を経験していませんでしたので、それをいち早く、それも受講生の立場から体験することができたことは幸運でした。終了後も、受講者内で新たな知見を共有し続け、我々全員が相当の知識を身につけることができましたので、春学期が始まってから、その知識を他の教員を助けることに役立たせることができたことは大きな喜びです。

本プログラムは大変よく構成されており、得るところは大きいです。私は物理を教えているため、専門用語は先生がモデルになるので正確に言う、スライドに載せて指差しながら説明する、その用語を言う前に間を取ると、先生が何かを言うぞ、と学生は用意する、それはゆっくり話すよりも効果的、といった細かい知識が、わかりやすい授業をするために役に立つと感じました。物理の授業では使いがちな Initiation-Response-Feedback (IRF) よりも効果が

高いのは Think-Pair-Share (TPS)ということも学びました。その際、学生の席を教員がコントロールしなければ成功しない、ということは目から鱗でした。授業手法の探求の流れで、Eric Mazur 氏の反転授業についての複数の動画を視聴し、新しい授業の仕方についてイメージを持つことができるようになりました。

Socrative を使って、その場で集計しながら遠隔でもインタラクティブな授業が可能であることも知りました。他の先生から教えてもらったり、自分でも Kahoot 等色々試し、春学期の遠隔授業では Mentimeter や、Quizalize といった Web サービスを使って授業中に学生の理解度を調べたりしました。今まで集計や出席に OCR を使っていたのですが、ICTの方が便利なのがわかったので今後はこれに移行します。この機会を与えてくださった CTL の小林様とクラスの皆様に心より感謝申し上げます。

## ヘザー・モンゴメリ

### 経済・経営学デパートメント

今年の Oxford EMI Training の参加者の内、母国語とアカデミック言語の両方が英語であるのは私だけだったと思います。今回私は同僚から、言語的背景によらず、英語が第一言語ではない学生を対象に英語を使って教えている人には役に立つ、と勧められて参加したのですが、正に彼の言う通りでした。興味があれば ICU の教員の皆さんも、次の機会にぜひご参加ください。

私のような、すでに 10 年以上 English Medium Instruction を行っているベテランであれば、今更学ぶべきことは多くないだろう、と感じている方もいらっしゃるかもしれませんが。実際、ほとんどの ICU の教員は、このトレーニングで紹介されたツールやテクニックの多くをすでに自然に実践していると思います。

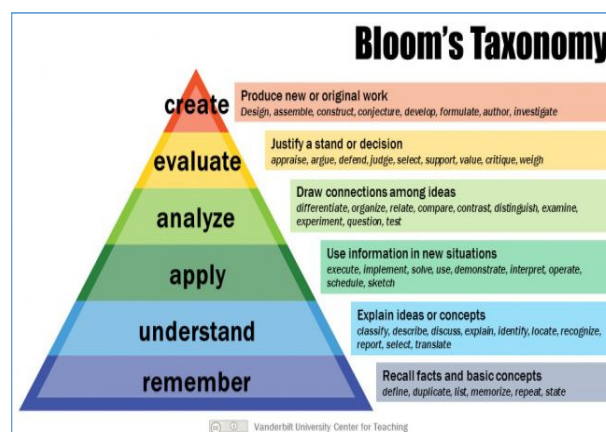
しかし、私たちが学生のために English Medium Instruction をよりシンプルにするために自然に行っていることの中には、学生のモチベーションと学習の両方に逆効果になるものがあることを、今回のトレーニングで知りました。同時に、授業をより楽しく魅力的なものにするために、私たちが自然に使っているであろう非常に効果的なテクニックの多くは、より良い学習成果を得られることが研究によって実証されています。

この EMI トレーニングでは、ブルームの教育目標分類学に触れることができました（図はヴァンダ

ービルト大学の Center for Teaching のものを参照）。私は無意識のうちに、一般教育科目のような基礎科目の授業ではピラミッドの下層にある学習に注力し、200~300 番台の授業や卒業論文ではピラミッドの上層にある学習に注力していたことに気がつきました。

EMI コースは、一般教養科目や基礎科目を含むカリキュラム全体を通して、より上層の学習を実施するための自信（と研究による裏打ち）を与えてくれました。学生にとって、より上層の学習はさらに重要であるということを、このコースでは学ぶことができました。

（日本語訳：CTL）



Vanderbilt University Center for Teaching

**辻田 麻里****教育学・言語教育デパートメント**

「オンライン授業初体験」

今回、English Medium Instruction (EMI) の5日間の集中講義に参加できて幸いでした。EMIに関連した理論と実践的な技術を身に付け、様々な専門分野や研究機関の教員たちと交わりを持つことを期待して臨みました。どちらも実現しましたが、それは予想していなかった、オンラインによるものでした。

初日は、ZoomにてEMI導入の講義から始まり、続いてMoodleによる自習の時間でした（例：課題のリーディング、動画、アンケート、クイズ、フォーラム・ディスカッション）。その後、一日の締めくくりに、ライブによる全体会があり、フォーラムに投稿した回答に対するフィードバックを受けました。春学期は全ての科目が突然オンラインになったため、研修で習得したZoomとMoodleの機能を早速活用することとなりました。さらに、Slackと呼ばれる学校や職場で使われているSNSアプリも使い始めました。授業やアドバイジングに取り入れたところ、学生、TA、教員とのコミュニケーション

がとても円滑になりました。研修で学んだことを直後にそのまま応用することが出来たのです。

研修で扱った概念の多くは、応用言語学や教育学で提唱されており、私には特に目新しいものではありませんでした（例：理解可能なインプット、高次思考技術）。それでも、実際の授業でその技術を実践するきっかけが出来たことは有益でした。例えば、コメントシートの代わりに、毎回の課題として、批判的思考や創造的思考を促すための振り返りの質問を出しました。MoodleのQ&Aフォーラム機能を使うことで、学生は自分の回答を提出した後、互いの回答を見て学び合っていました。また、教員側が英語の発話を調整する方法を学んだことで（例：イントネーション、語彙、文法）、様々な背景の学生とコミュニケーションをとるのに役立ちました。

唯一残念だったことは、対面授業の機会がなかったことです。また教室に戻ることが出来たら、この「プロジェクト」を是非完成させることを心待ちにしています。

**青木 浩幸****教育学・言語教育デパートメント**

大学の教員は専門分野については日々研鑽を積んでいても、教えること、教育のトレーニングの機会は稀かもしれません。Oxford EMIの経験は本来の目的である「教育の方法としての英語」(English Medium Instruction)を超えて、大学の教育の質の向上の手立てについて考える機会となりました。

Oxford EMIで学んだ考え方・姿勢は英語開講の授業に限らず、日本語での授業でも参考になると多くの受講者が認めています。EMIでは媒介する言語の問題により学生の理解力が低下するので、単に従来の授業を英語にただけでは足りず、よりよい授業にするための工夫が必要です。この工夫の代表が今流行りの用語で言うなら「アクティブラーニング」ですが、これをEMIを通して学ぶことができました。

このような機会はOxford EMIを修了したら終わりではなく、これからもあったらいいと思います。EMI以外のテーマを通して学べないでしょうか？

データ基盤社会やダイバーシティなど時代の変化によって大学の教員も学びたい・学ぶべき内容はたくさんあり、その勉強会を機会として教育スキルも学ぶ機会とすることです。EMIでも「新しい時代の問題」でも双方向性が求められる点では共通しています。

例えばEMIを振って（もじって）Digital as a Medium of Instruction「教育の方法としてのデジタル」のワークショップを連想すると、単に機器の使い方を学ぶことに留まらず、これを機会に教育学・教育技術研究の蓄積が共有されるFDのプログラムを開発できるでしょう。Oxford EMIでは例となる授業を観察して分析する活動が有益でした。他大学も含めた多様な分野の教員が、自分たちの授業とアイディアを持ち寄って教育の実態を客観的に振り返り改善に資する貴重な体験は、かけがえがありません。

**鎗木 崇史****自然科学デパートメント**

今回、私が参加した Oxford EMI プログラムは予想をはるかに超える有意義なプログラムであった。このプログラムには昨年度の新任教員向け FD プログラムに参加したメンバーから誘われて参加した。

NFDP でも EMI に関する講義はあり、知識としては理解できた（つもり）であったがどのように自分の授業に活用できるか明確にしないままにしまっていた私にとって、Oxford EMI プログラムと共に過ごした1週間は大変知的で刺激的な日々であった。ちょうど新型コロナウイルスの感染が拡大していた時期で、Oxford EMI プログラムも開催が危ぶまれていたがオンラインで開催することとなった。

このプログラムの中でも最もハッとした言葉が、「教員は知識の伝道をするためにいるわけではない」というものだった。それまで私が行っていた講義の一部は「知識の伝道」の典型として挙げられていた「教科書を授業回数で分割して教えていく」ものが含まれていたため、前述の言葉が自分の授業を省みる一助となった。たしかに講義で伝えるべき知識は一定量ある。しかし、「それは限られた時間で学生と時間・空間を共有して伝えたい内容なのか」、

「事前学習で学生が自分で本やインターネットなどで理解できる知識ではないのか」と、深く考える機会になった。

さらに、今回の EMI プログラムがオンラインで開催されたことも非常によい経験となった。プログラム内では、事前学習として毎朝 Moodle 上で視聴する教材や意見を受講者間で交換するフォーラム、協同作業、クイズなどが提供され、その日の夜に Zoom を使ってフィードバックを得られる仕組みとなっていた。オンラインの講義を受講するのは初めてで、その進め方はこれまで経験した通信教育とは全く異なり、遠隔にしながら他の受講者とも協力する仕組みが散りばめられていた。

今回のプログラムを受講して、そこで学んださまざまな教授方法を実際の講義で実践するにあたっては、自分の講義内容・スタイルに合致したものを吟味し、よりよい講義を学生に提供できるように改善をしていきたい。最後に、今回このような貴重な機会を設けていただいた ICU、共に参加した同僚の先生方、サポートしていただいた CTL のみなさまに感謝いたします。

**上野 優佳子****リベラルアーツ英語プログラム**

今年3月に開講された Oxford EMI コースはコロナの影響でオンラインとなり、最初はとても抵抗がありましたが、実りの多い機会となりました。受講後、ICU での授業もオンラインになることが決まり、受講者側の気持ちができる貴重な体験をすることができました。

受講して一番印象深かったことの一つ目は、EMI で教えておられる専門科目の先生方は大人数の講義形式の方が一般的であり、ELA のようなグループ活動が中心になる授業に対して興味をもっておられ、また推奨もされていることでした。

もう一つ印象に残ったことは、別の大学の事例から、同じ大学内で EMI の専門科目の先生方と語学教員との交流があまりないことが世界中の EMI の大学に共通の傾向であることでした。今回の参加にあたり、私は英語の語学教員であり、英語を使って専門科目を教えている先生方とは立場が違うため

に、参加して何を受け取ったらよいだろうと考えていたのですが、上記のことが大きな収穫となりました。この EMI コースのディレクターの Dearden 氏から、世界中で一番 EMI が進んでいるのは早稲田大学政治経済学部で、EMI 専任の語学教員がいて、専門科目の先生と一緒にコースや教材の開発をしていること、日本人だけでなく英語を母国語とする学生にも英語のライティングの授業を課していることを伺い大変興味深く感じました。一般的に、大学内の語学教員の立場が弱めであったり、反対に、言語ができれば専門家でなくても専門科目を教えるように言われる語学教員もいたりしますが、Dearden 氏から語学教員は語学教育のスペシャリストとして EMI 教育に貢献できることがあると教えられ学ばされました。

語学教員にとっても目の開かれる時間となりましたので、参加をお勧めしたいと思いました。

**Oxford EMI Training:** <https://www.oxfordemi.co.uk/>

**EMI に関する過去の記事 (FD Newsletter)** 「Oxford EMI トレーニングプログラムの開催」など  
[FD Newsletter Vol. 24 No. 1](#)、[Vol. 23 No. 2](#)、[Vol.22, No. 2](#)、[Vol.22, No. 1](#)

## 新 TA 制度導入に向けた取り組み

### 教員向け「TA 活用のためのセミナー」の実施

2020 年度からの新 TA 制度導入に向けて、2020 年 1 月から 2 月にかけて計 5 回、教員を対象とした「TA 活用のためのセミナー」をオスマー図書館 1 階で開催し、約 90 名の教職員が参加しました。ランチタイムに 20 分程度という短い時間ではありましたが、セミナーを通して新 TA 制度ならびに TA のあり方について共通理解を深めることができました。

新 TA 制度は、主に本学の大学院生を本学の非常勤教育職員である TA として任用し、将来教員や研究者になるためのトレーニングとして、学部教育の補助業務に従事してもらうことを目的としています。同時に、学部教育におけるきめ細かい教育の充実・維持を目指しています。

セミナーは、小瀬 CTL センター長が新 TA 制度の説明等を行った後に、毎回異なる教員が効果的な TA の活用事例を紹介するという構成で実施されました。

### 新 TA 制度概要

セミナーの冒頭で、小瀬 CTL センター長より以下の 4 点について説明がありました。

- ・ 任用計画書はコースに対して作成する。コースをデザインする際、TA の役割についても考慮することが求められる。
- ・ 学部 4 年生も TA になることが可能。（3 つの TA タイプのうち、Tutor タイプに限る。）
- ・ TA は毎学期業務報告書を提出する。
- ・ モットー：TA の採用で教員の負担は大きくなる。

続けて、非常勤講師が担当するコースに対しては TA ではなく学部の授業に関する事務的な業務を担当する学生アルバイトである CS の任用を推奨すること、さらに、教員はハラスメントに十分注意するよう、協力を求めました。ハラスメントに関しては、教員から TA、TA から学生、学生から TA に対する例を紹介し、それぞれが TA を「非常勤教育職員」として認識し対応することを促しました。



図 1：TA 活用セミナー ポスター

### TA 活用事例 (1)

#### ジェレマイア・オルバーグ教授

(哲学・宗教学、平和研究メジャー)

自分（担当教員）のために TA に働いてもらうという考えから、TA に高度なスキルを身につけさせるため、より専門的な教育者として育てるためにはどのような仕事をしてもらえば良いだろうかという考えに変わってきた。

TA を育てることは担当教員にも学生にもメリットがある。ある TA は E/J（英語ならびに日本語）開講のクラスで自らボキャブラリーリストや授業の要約を日本語で作成し Moodle にアップしてくれ、履修生のためにとても役に立った。教室の準備や録画など授業準備の一連の業務の流れをいかに計画的に行うか学ぶことも決して悪いことではない。すべてのスキルが TA の教育者としての成長に繋がる。

**TA 活用事例 (2)****布柴 達男教授 (生物学、環境研究メジャー)**

TA を次世代の教育者として育てるために実践している、生物学メジャーの実験における TA 活用事例紹介。TA が業務を通して何を学びたいのか授業前に確認し、TA の希望に合わせてどのような学びの機会を作ってあげられるかを考えている。

最後には必ず TA としての学びの振り返りを一緒にを行い、何に気づき、学んだのかを言語化し、気づきや学びを再構築し深めている。

**TA 活用事例 (3)****吉田 智行教授 (言語学メジャー)**

TA は履修生がコースの内容の理解を深めるための役割を担っている。具体的には、TA は週 3 コマの授業に必ず出席し授業内容を確実に理解したうえで、週 2, 3 回授業とは別に TA セッション (チュートリアル) を行い履修生が授業を聞いてわからなかったことや、課題について質問を受ける。

教員は TA と定期的にミーティングを行い、セッションでどのような質問が何件ぐらいあったか等を確認している。また、TA が学生からハラスメントを受けないよう日頃から気にかけている。

**2019 年度 TA アンケート集計結果**

CTL では、毎学期 TA と CS\*を対象としたアンケートを実施してきました。2019 年度の TA アンケートの結果は次の通りです。

昨年度の TA の主な業務は、教室機材に関する作業 (予約、設置、操作)、教材に関する作業 (印刷、準備)、出席管理とコメントシート回収、成績管理でした。さらに、質問対応、グループ討議補助、コメントシートや課題の分析、プレゼンテーション作成と実施、チュートリアルの実施を担当した TA も一定数いることが分かりました。新 TA 制度では、後者のような、より授業内容に踏み込んだ業務を担当する機会を増やすことを目指しています。

アンケートでは、業務量と手当のバランスについても確認し、業務量、TA ポイント数 (手当)、当初の任用計画と実際の業務の食い違いという点では、概ね問題はないことが分かりました。さらに、回答者のほぼ全員が TA としての経験は将来、教育者/研究者となるために役立つ、あるいは少し役立つと答えていました。これは、多くの回答者が自由記述設問

「担当なさった先生方から学んだこと、具体的に役立つと思ったことや参考になったことがあれば自由にお書きください」に好意的で前向きな回答をしていることから良く分かります。以下、回答を一部抜粋します。

- ・ 授業の進め方、話し方、学生の注意を惹きつける方法など。また学生の疑問に適切な仕方に対応していたことが将来のキャリアに向けて参考になった。
- ・ The lecturer carefully organized the course in which students could develop their thoughts by creating an interactive atmosphere in the class. I've learned that it was the best way to raise a student's curiosity and intellectual ability to the fullest.
- ・ 大人数の受講者に対する試験方法(座らせ方、問題配布、持ち物、アナウンスなど)は、とても勉強になった。実際に大人数の授業や試験のアシスタントをした経験があるかどうかは、今後役に立つと思う。

**<2019 年度 TA アンケート>**

アンケート対象者：2019 年度に TA を務めた者 (合計回答数：246)

|           | 春学期                                          | 秋学期             | 冬学期           |
|-----------|----------------------------------------------|-----------------|---------------|
| TA 配置コース数 | 338 (この他に ELA と JLP の場合はプログラム全体に TA を任用している) |                 |               |
| 回答数       | 107                                          | 94              | 45            |
| 実施時期      | 2019/6/17-7/3                                | 2019/11/8-12/13 | 2020/2/18-4/9 |
| 実施方法      | オンラインアンケート (担当したコースごとに回答してもらう形式)             |                 |               |

**今後の展開について**

新制度では TA アンケートに代わり、「TA 業務報告書」の提出を義務化しました。TA には自身の業務が授業や学生の学修にどのように貢献しているのか、また、自身にとって学びの機会になっているかという点を気にしながら授業に携わることを期待しています。

2020 年度春学期は全ての開講授業がオンライン化したことにより、TA の授業への関わり方や担当教員とのコミュニケーションの頻度や手段が大きく変化したことが予想されます。CTL では、「TA 業務報告書」から、新 TA 制度の効果のみならず、オンライン授業での TA の役割にも注目していきます。また、TA のニーズを聞きながら今年度中にスキルアップ研修を提供する予定です。教員に対しても、効果的な TA の活用事例の紹介を継続して行います。

(学修・教育センター 大野、松木)

## 編集後記

CTL におけるコロナ禍は、オンライン授業が決まるより前、2 月ぐらいから始まりました。3 月 9 日から Oxford EMI トレーニングコースをオスマー図書館で開催する予定でしたが、Oxford の講師陣にとって来日をやめるという選択肢はなく、いろいろと悩み、その時 MoodleMoot というイベントが急遽オンライン開催になったのを見て、オンラインでの可能性について聞いてみたところ、オンラインでの開催が実現しました。対面でのグループワークに期待していた他大学の参加予定者の中には参加をキャンセルされた方もいらっしゃいましたが、結果として、EMI だけでなくオンラインでのコース運営の手法が、4 月からの授業に大変役に立ちました。

EMI コース開催中、参加された先生方がランチタイムに集まっているところにご一緒させていただきました。自然と話題がオンライン授業のことになり、Zoom や oogle Meet を試してみたり、情報を共有することができました。その方々はその後他の先生方のサポートにあたってくださいました。

短期間でコースをオンライン化してくださった Oxford EMI の講師の先生方、ボランティアとして他の先生方をサポートしてくださった先生方に、この場をお借りして感謝申し上げます。

オンライン授業の経験を経て、オンラインか対面かに関係なく、当たり前のように授業に ICT が取り入れられるようになりました。今後、履修学生がますます多様化していくなか、先生方の負担を増やすことなく、効果的な授業を行うことができるようお手伝いできればと思います。ICT 活用についての質問あるいは良い事例などありましたら、CTL までお知らせください。

小林 智子  
学修・教育センター 部長

～9 月 1 日より、オンライン授業受講のために学生にラーニングエリアを開放しています。～



発行：国際基督教大学 学修・教育センター  
Published by Center for Teaching and Learning

International Christian University  
1F, Othmer Library, 3-10-2 Osawa, Mitaka-shi, Tokyo 181-8585 Japan  
Phone: (0422) 33-3365 Email: ctl@icu.ac.jp